類字名所和歌集　七

内閣文庫
和書
三四六六五
二〇二函　八冊　五架
正（八冊）

内閣文庫
番號　和 34665
冊數　8（8）
函號　202 140

国立公文書館
National Archives of Japan

類字名所和歌集第七

サ一代集撰書　恵行

濱路

千載雑上　繪鴻　濱磯

いつとなく浮寝の月よめをさまして忘鴻の濱よりぞ　前参議親隆

同　ちよの千鳥なれぬ浦よ忘信て忘鴻の磯よりぞ　菅原家基

同　春霞忘鴻の濱とこめつれそ波の叩くともみしぬけさぶ　菅原重俊

新勅撰雑五　濱山ちこしてふ吹沙風ふるゝ一夜乃松も浪やの叩くらん　後徳大寺左大臣

續古今春上　春ふかくさゝ忘鴻の上も沖津忘濱　皇太后宮大夫俊成

玉葉雑旅　くりそて四人あくみとりゝ忘鴻とあまてよりつせゝそ思　左兵衛督惟方

山城

氷室山

千載春下

とのゝ氷室山のあけぼのゝ雪はなれぬるかすみ　源仲正

同夏

あつさをしのぶ冷しるとゝりの氷室山のきゝ水の氷るなつ　大炊御門右大臣

新後古今夏

くれなゐとあくるゝ雲もなれぬ氷室山いつの涼しき川の水　土御門院

同冬

限あれぬ宿とのゝ雪のきゆる日もまれ氷室の山の下草　頓徳院

樋河橋

新勅撰雜

ゆく末をかけ見とゝゆる羽うちをそなる波をひく川の水　俊成

廣澤　池

同

ひろ沢の月をみてよのゝ

後拾遺秋上

但人もなれ山ぢの秋のよゝはれぬ光もさびしきのゝ　菅原範永

信俊朝臣

同雜
山のてふかくれかくそう秋の月世をとなに雲にまとけり　菅原範永

新後撰雜下
老てこそ我うけはしや替れらんむすはれひろ沢の池　天台座主道玄

風雅春中
ひろ沢の池のけしきの柳のみとりも深く春ぬるめり　為家

同夏
ひさしく涼てひろ沢の流れ来も後ーしそ思ふ　後宇多院

新千載雜中
たの人をけてうつりてこそ月のこそめれひろさわの池　頼政

新後拾遺夏
ひろ沢のうく舟流をつるしきを神ゆもうをはめりん　權僧正道我

平野　原

拾遺賀
千ゝの松平野の松の枝をけこそ代も八ゝ世を経そうつ　能宣

同神祇
わけ見ぬ平野の色のあや松よりたちうさぬるく　元輔

後古今神祇
那波川はみそこりるせ一筋なきやひゝの松にかれる白雪　家隆

葛野郡

新千載神祇
ちはやぶるひゝの松をきふるとも花咲春のためしなりらめ　読人不知

廣瀬河

大和

後古今恋三
ひろせは神たくうつ流させるひぬのうそ引きて思ふん　同

新千載夏
ひ泊をはあるりの小田水をそ入て神つくりのそまの苗代　法中定田

新後拾遺夏
ふりあるよ行まさるそひ泊をはわふとうるそれ水代白波　秋阿法師

一言神

後古今神祇
天ゝと行くふ一言代神のこそや二ひなさ祈ーれらん　賀茂成久

日晩野

同

亭子院女御御使ーかれそーきるはとも不
けのうまつるそ日くしそ雨とふ不とふんはあれ
ひくらーそ行るぬせうひもあしひもとく妹も待ーと思て　大納言泉

拾遺雜上

檜原

山城

なにゝ祈の言よけゝゝ支寒向れひゝゝの山とたゝふ人九

新勅撰冬

寒向のひゝゝの山も君とらて西来ろゝゝ紅人もなし　賀茂重政

玉葉春上

吉向れひゝゝの山の雪ゝまてまの霞をたかひきたれる　基俊

同冬

吹ゝ迄ひゝゝの山の風ゝ雪もわゝまぬひゝゝ時ゝ雨ゝ　後鳥羽院

続千載夏

なゝ祈の言中もゝゝゝまさりくの松原の山れ白ゝ雨乃ゝ　法二位行家

新後拾遺春上

もゝ霞ゝなひきわゝゝゝ寒向のひゝゝの山の夕乃ゝゝかゝ　清原深養父

新続古今春下

吉向れひゝゝ山のゝふこ島花のゝすゝ小支人ゝゝ　土御門院

同冬

流小行河ゝれらん吉向乃ひゝゝ　中務道前太政大臣

檜隈川

為河内国之由雖有異説宣化天皇之皇居大和国檜隈庐入宮辺川云云仍當国載之矣

古今太宗歌合

ちゝのくゝ支の隈川ゝ波とゝくゝ水の人新をたゝみん　同

続後撰冬中

波ゝもゝる支の隈川乃吉流ゝ月乃人新を綾しけゝゝれ　權中納言長方

玉葉夏

波ゝゝめて新みゝ水や河ゝゝ　中臣祐茂

続千載恋二

波ゝもゝゝ支の隈川ゝあゝゝゝ吉ゝゝ人の新ゝゝ小ゝめ　津守国助女

続後拾遺夏

波ゝとめて支ゝゝゝくまん新波す支のくゝ川の水乃ゝゝ波　後宇多院

同別

思出ゝく支のくま川ゝ小ゝ支すゝゝも浮ゝ心の夕ゝみゝゝゝん　西園寺八道前大政大臣

新続古今冬

すゝゝゝゝ支の隈川乃年れ吉水のゝ波のゝまゝゝゝ　深守法親王

廣田社

摂津

新続古今神祇

きゝゝ支ゝゝゝてゝゝゝ支川れ来ゝ支くゝゝひゝたの祈ゝ紀ん　六条入道前太政大臣

水鳥

或云考後

続古今雜中

ゝれゝゝきゝゝ沙風吉ゝ水鳥やゝ小松のゝんゝ小ゝゝゝ波　中務卿親王

引馬野

遠江

金葉小春
春霞たなびくせとの嶺の松ひくまれにへよはれたきかな　匡房

後拾遺秋上
うら衣ぬれまさるかな梓弓ひくまれにへの萩のあさつゆ　式子内親王

法良　山根歌

千載春下散イ
桜咲ひらの山風吹まくはむろうなりもものうら波　左近中将良經

同秋下
ひく波やひらの高嶺の山下風あらし海の畑とはなりけり　刑部卿範兼

同冬
荒海ひらの高嶺の松根海ーに表をくだく秋の月かな　道日法師

新古今春下
花さそふひらの山風吹まくはむろうなりもものうら波　文内侍

同冬
ひく波やたかのれ〳〵満風さえてひらの高嶺の雪ゆうや　法性寺入道前関白太政大臣

同雜下
ひくなくやひらの山風海かけて釣する舟の神うちの山　後人不知

新勅撰冬
大荒をひらの高嶺の近くれて雪ゆうかぜ見ひらやれ　西行法師

後撰春上
足波をたひらの高根の雪さえて氷摘へく野をやもとめ　平兼盛

同秋下
吹ひろすひらの山風やあらの〳〵むすのうら人衣うつなり　後鳥羽院下野

後拾遺冬
やひたらふたひらの山風の月さえて秋の海けさうの波　經信

新後撰秋下
秋の夜をひらけ山のをちこねせ月ゆえ秋ふたうの濁波　院大納言典侍

後千載秋下
さく波やひらけ山風さえて月うけをしたうけ〳〵濁　鎌倉右大臣

同雜上
たちの乃雲けの絶する絶小月ちえて雲吹ひらの山のせ　行觀法師

後拾遺冬
舟出するひらの湊の初氷さかまくるうるのさやけき　法橋弘助

新千載春下
たちの浦やうをくれ波も白ぬの荒吹れるひらけ山風　伏見院

新拾遺冬
深行く山下風さえてひく波乃ひらけ〳〵澄ふちらり明なり　宗尊親王

同
湖の海やひらけ山のせさゆるうのやうの水ゆるの月　僧正慈能

同雜上
寄る荒ひらけ山風吹れよかさく浪ふれて出る月うけ　等持院贈左大臣源義詮

新後拾遺雜春
ひらけ山高嶺の雲吹なへ小荒とよをくるものうら波

新続古今春下

さゝなみや滋賀の濱へに駒とめてひらの高根の花をみるかな　頼政

同冬

行く波やひらの山風さゆる日も汀氷てよする波もなし　後二条院御製

同

みよしのゝ山あらしむさむき日とひらの高根も雪降にけり　後京極摂政前太政大臣

比叡　社　山　高根　杣　宮　同

ひえにのほりてかへりまうてきてよめる

古今春下

山たかみつねに行く秋おしき花のせそむにまかせてへらするかな　貫之

拾遺哀傷

ねきかくる比叡の杣のゆふなきま黄葉のちるもまことやめてきけ　僧正実因

同恋四

我恋のあらはにみゆる物ならは都のふしといはれなましを　読人不知

ひえの山に二月八番とて花すと行くる事侍けり

それ〔を〕以〔て〕せんとて人々山にのほりけるを待けれは

高雄の山にて捕頭となりける事を思ひ出て

後拾遺雑五

さきやらん人にかたらん花の色よりは山城みんとそ　蓮生法師

宇治平等院のあるしなりけるすゝ行きてひ

ゑの山のうしろをなかめやりてよめる

金葉雑一

宇治川の底のみくつとなるまても〔かけ〕し山のうしろを〔み〕ん　忠快法師

ひえの山の念仏のおりそ月をみてよめる

詞花秋

左津の楼雲吹たちふる高ねまく入まてみつる秋の夜の月　良暹法師

続後撰神祇

大ひえや小ひえの杣に宮木ひつゝれの榊木の祝かなるらん　日吉社古歌

少将高光からの〔お〕ろしにひえの山にのほりける中にて

出けるといひつるなりしひえに思ひてつかはしけるといとふ

ゆへまやうしみてよめる御歌

同雑下

あさかれとも〔さ〕ためぬ山に住しいつる比叡の草の露しもぬれし　大納言師氏女

文永元年十月後源院の御法華会に参る日高の
ありけれいろいろきくる
後拾遺神祇
神垣やなみの紅葉は色とそひえの杉をそなる　祝部成長

ひさけしやや

玉葉雜三折句又新拾遺折句
人ことに思そ嫌さきはの花を世の佛の色とそ　慈鎮

ひさの山はかりはそ荒れはてしろく咲しを　上下畧

風雅雜下
きしのみれは太山は花を咲はかりなけきそ春もものうきかな　前權僧正全玄

同神祇
波母山やかひしの杉は雪もきしとふ人もなし　日吉地主權現

新拾遺神祇
近たにく神代とをへし大ひさやかひしの杉はうろ白し　法卜成運

法叡山の中雲にはけしめて花打とりてうく
春はひけるとて

同尺教
ぬしけく仏の御世まてもきたる人よ法のとをしる大　傳教大師

山は春雲は流西は錦よいつ来て伯耆の方

同
かすは山の古ねの錦のあはにるうを眺とれとろうとうれ　心海上人

新後拾遺雜歌
ありつめあ〜ぬもあ迷や我山の杉生の宮よ法のしるし　權大僧都能運

百日は入雲のたあるは法叡山を動寺かけかはとそ
みゆりけり

同尺教
ありのひすふ法とものこをるくなる山の下水海深くとも　入道二品親王
新後拾遺今神祇
大ひしやや杉をりけと弱まは色こそわれ神のうち　一品法親王充仁

日吉　神宮

同

仮三条院は時始て日吉の社に行幸侍りけるに
ありそひかうくふへ文字杉せ事りて漢侍りける

後撰雜抄
あさ〳〵と花は日吉の山のうひかうる春代やいつん　大蔵卿実政

土載雜抄
秋新むる日吉の花新そやく〳〵山の紫のやへもさくらのやそ　法印慈円

日吉大宮の花を見ひやくよりる

同
いけとなく物の高ねの沈はれ光をややすちのの〳〵滝　法橋性憲

同
法華まるるねのあるよの時てをる日吉の花を問〳〵をそみる　中原師尚

新古今雜抄
志賀やきふの子日の花姫小松ひん素色さうをへしをそ

あの宮を日吉の社頭拝のうしろの山ふまをて子日して侍けるよんの花ふみもけるとるん

日吉の社ふまをけるの中ふ二首

同
やう〳〵る新ろ暮よくそうる花もの光を成るすちを　慈円

同
そなへて日吉の新て暮らるふ波あるゝ寺詣日にふ非　同

かの宮の守ふて侍りける時白山ふうてたつけるを

思ひく日吉の人の文くそうん侍りける

同
ふとも〳〵あ〳〵白山巨れをの〳〵ら花をと表ともみよ　右京大夫孝補

日吉社歌合花心をよ侍りける

新勅撰雜抄
ものの浦ふ又の波たてく天くをそいけ〳〵への弘　慈円

同
初日ほそうたくのをの光こう山うけ照すの形〳〵やそれ　同

同
うををとうを景ふ光やをまをとを手ふ花こをの月の入ふ花を　同

日吉の社ふよこてをまをけるをのの中ふ大文を

後撰雜抄
いけ〳〵へのほくる花林ふらを花の白をとよするをの乃蔵院　後京極摂政前大臣

十禅師文

同
末のをふう天世をとてくをををくくき道にををるの月　同

十禅師社よなみてたてまつりける　慈鎮

同　又後古今非撰
鶯は山ぶかの月をめづらかにて秋たつ梅の香をぞ惜む

同　八道親王家歌合
やりつるれば光ゆゑ又ちるかやみちもまん暁のそら

聖子文りよみてたてまつりける

同
やつるる光をへたてやしの一あれ雲ゐの秋のうの月　權少僧都良仙

宮人の社にたてまつりける

後京極摂政前太政大臣家歌合
あ〻は又光をかくやとをうれあ一の白髪や雪のみく雪

同　白河法皇御願の百首歌よみをしひける

後拾遺非撰
道あまと我世ぞ非に契れとてふみ初れたるの山越　後嵯峨院

同　元下御祈とて白河ふ御ふてう墨とすうれと世と彩れ外　山階入道左大臣

同　白河とて新しく御願のなれ墨ぶ多とてつけ新院　天台座主公豪

同　墨ぶ文白河院うけ院新ますもいのて平世ぞやとをかまー　法覚親王

大文ようんて年けりこの文ぶ

同
霞に〻鶯の高砂の雲の文院日ようの新に絵してうみる　權少僧都良仙

宮人ぞ文ぶく花のちりけるをみてよめる

同
花ぞ一ちれう平て山さく〻今ものく〻す雪とみりけく　後人不知実ハ行蓮法印ヒヤ

新後撰足数
月院ぶ〻ぬ日吉のうをを光りよてはせ世ようう雪と時めれ　祝部成貫

同非撰
墨ぶ文世院迎さんとちうひてやはようの文ぶ院新撰　天台座主道玄

同
あひみあひて白吉のをろさやう成七乃宮のて〻を光る　祝部成茂

同
ちりふ時ふむやう〻ま一白吉の新乃てらぶ〻ぶをを　慈鎮

白ようう二十首の文をりける中よ

玉葉非撰
うつ〻をぶけのこ山と守れとて藤の宿れ非ぶうさけ　法橋春誓

續千載神祇
くもりなき心の清水に千早振神も日吉の影をうつさん　権僧正桓守

同
君守る神も日吉の影そへてくもらぬ御代をさしてまもらん　前大僧正仁澄

同
さりともとてらす日吉と頼みつれくもらぬまでと思ひけるかな　慈鎮

同
浅からぬめくみにさそふ後世もやさをも日吉の影をたのむとて　法眼兼誉

續後拾遺神祇
わすれても日よしの影なれはあとなしとなほ鳥の跡　民部卿為藤

同
明らかに日よしの影を頼みつれとけのあくへ九重の上まで　後嵯峨院

同
十禅師にて
神垣にさゆるの月をみても猶朧こそれちりひとつなし　前大僧正道玄

風雅神祇
久かたの天つ日よしの神まつり月のかつらも光そへけり　入道二品親王尊円

同
世とともにかくて日吉の神垣に心の幣をとらぬ日ぞなき　為相

客人権現を

新千載神祇
わきて猶たのむ心も深からん跡たれ初し宮のしるし山　前大僧正道玄

新拾遺神祇
くもりなくてらす日吉の神のますに又光そふ秋の夜の月　祝部成繁

同
あひにあひて守る日吉の数々に七の道の国さかふらし　祝部行親

同
たのもしな我すむ方に跡垂て曇らぬ日吉の影に道ある世をみん　為世

新後拾遺釈教
上もなくたのむ日吉のかけなれは我たつ杣をやかててらさん　権律師幸円

日高杣　美濃

風雅夏
世をてらす日高の杣の木の末守るけさ清影に今か逢らし　藤原光俊

日置里　丹波　多紀郡　順和名国郡如此

同
曇なき君か代にきあふみ日置の里もにきはひぬらん　匡房

比礼振嶺　石見

新後拾遺秋上
石見なる高津の山に雲きえてひれふる峯を出る月かけ　後鳥羽院

日晩山　同　八雲抄當国載之又筑紫りとうく

後撰旅
ひくしの山ちとくゝみさよあてゝ木の末毎ふる紫無せ沓　管原右大臣

檜隈河　紀伊

風雅抄
名草山とるや掛の沓ゝもさすゝ神わさたけさゝの隈の河　紀俊文

引津　筑前

新勅撰恋四
梓弓ひゝ川の波なるゝのゝそゝ袖と云を初りん　読人不知

法礼振山　肥前

続後拾遺夏
松浦河川岩ゝ〜さゝ姫のひれゝる山乃ゝ月毎乃ゝろ　中務宮宗尊親王

新後拾遺夏
蝉ゝの衣ゝり秋とまつゝ時さひ迄ゝる山れ暮ゝ帝ゝさ　定家

新後拾遺恋二
恋ゝれおよ磐ゝ〜来とゝつゝ時さひ迄ゝる山と宿ゝつゝ世　栄仁親王

法吉根　豊前

玉葉
いゝさゝゝ法吉根の振の波沓ゝ山ゝ宿ゝ山ゝ

あの高ゝあれ人筑紫のひゝの山に絶て後世の事

初ゝ時る波ゝいゝ紀ゝ恋ゝ乃ゝ根の池水ゝ

ゝゝ山ゝ又ゝ色のゝゝと思ひ行ゝけてゝゝ

伊勢ゝ紀ゝに岩ゝ世紀ゝ事ゝとゝん

引野　壹岐

古今恋四
梓弓ひゝ行ゝ来つゝゝの思人ゝゝのゝけりん　読人不知

あの奇ゝある人あめ紀ゝ門ゝ乃ゝ紀ゝ祈ゝ

紀ゝけゝとゝんゝ

後拾遺恋三
浮ゝゝ山ゝゝ世ゝつゝ弓ひゝ紀ゝ行ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ　六条院小宰相源有長

月
あつゝさゝゝ引ゝ行ゝ〜ゝ〜ゝ後ゝ〜ゝ来人ゝ〜ゝ来ゝゝゝ

干潟

三代集雜二
くまゝなくなるらゝ夕汐乃ひかてこの潟に袖こそ　為家

新千載雜上
海原や沖あれくれて夕汐乃ひかてこの潟よりなみ波たつ　伏見院

未勘

近江

守山

古今秋下
白露も時雨もいたくもる山ゝ下葉なからに色かはりけり　貫之

後撰秋下
足引乃山乃山守りる露乃秋をきにけるかな　同

拾遺別
振ゆゝ神こそ守るれりる山乃桜乃木ゝを折はせぬ〳〵ちん　淡人不知

金葉恋下
ちさ海道と余れ涙をりる山乃ふけきふれけく桜やくり　菅原忠隆

詞花秋
秋ゝもの月ゝ光のゝりる山をあのゝ下のけもさやゝやるも　菅原重基

嘉元元年高倉院御所大嘗会悠紀の神あうひ
乃年近江国守山とよゝる

千載神祇
皇ゝとやゝと万代ゝ神もこれゝにゝりる山のゝうあま　京内侍永範

新古今秋下
露ゝ時雨りる山ゝけの下ゝ葉ぬるゝとゝたら紅乃秋見る　家隆

同賀
皇ゝとゝ盤ゝ盤ゝ守山のやま人なゝ〳〵やゝのつゝをり　或部大輔資業

続古今秋下
たゝぬまてあるも時雨もうちつゝきもりゐる山も紅ひまなし　左大臣

同冬
はつかに月こそいてくれる山はもをしらぬこゝろの風　条議雅經

同恋一
いつしかもん神ゝゝ林まもる山のたまくしけて夕日出るし　光明峯寺入道前関白太政大臣

同恋三
時雨のぬ涙よりふもゝ山のたゝぬ袖のあもはそくむなし　前大納言伊平

続拾遺秋下
もれ山もまのゝ下ゝくゝ時雨なる秋神のこせ行の紅葉も　定家

新後撰恋一
いつふもん神ゝ人めとも山はもをしらぬ時雨もなりゝ出るし　祝部成長

玉葉雑三
守山乃峯の紅葉も散ぬるもたゝる紅葉乃初しくも芝乃　真之

新千載恋一
思ふかをたゝし紅人め守やまの下吹風の夕しみしねそ　如覚法師

同恋四
いつよせむたけ人めと守山の下ものこらをもこれ形法　俊成女

新拾遺恋一
夕たゝくれる山法にたゝれてこうろふ神の夕やまりてん　法印覚為家

新後拾遺恋四
人めも山たゝくれ水くきの夕後ぬれの音信もをぬ　読人不知

新後拾遺秋下
あるゝ〳〵月もまるもとりる山の下紅いろと紅葉してゝる　侍従為敦

同恋一
白雲をりゝてふ山のたゝ深ゝ後ぬれけきの夕やこゝ　右原基任

諸神歌

同

宮法元年法院の法時大嘗会懸紙方和歌

うゝ法和つゝとゝめ法

千載和歌
古の和代法代ゝもゝ和の和るいとひゝ和の代のため　国房

元慶元年今上の法時大嘗会懸紙方和歌

和あゝ和の和近江国法和つゝとゝめゝ

同
もゝ和むゝ今ゝのふゝ和ゝ和ゝ和ゝ和ゝ和ゝ　右原李經

望月牧

後撰雑二　又拾遺雑上
望月の駒ゝゝそゝ出つれたゝるゝゝ山も越ゝる　素性法師

拾遺秋
あふ坂の関の清水にかげをみるいまはやうらん望月の駒　貫之
後拾遺雜上
あふ坂の板の材をひく筏もはかなくみゆるうらの小こま　良暹法師
同
うら月の駒引時をあふさうの木下露もたえまなきかな　惠慶法師
金葉秋
ふるさとをいでしうら月の駒なれこそあふひをあふちの花　源仲正
新古今雜中
ちのはら山のふもとの石道にとりて又あふぎうら月の花　定家
新勅撰秋上
あふさかをいでしうら月の駒なれこそ月の出る望月　後京極摂政前太政大臣
後後撰秋中
あふ坂のの関をいでしうら月の駒なれこそよしうの望月　大蔵卿推具
後拾遺秋上
年ふれどあふの上をみてみ月の駒のうけも望月こま　後法成院御製
玉葉雜一
引のこまてをみちこそ色なれ山やかすみ望月の駒　常盤井入道前太政大臣
同中
駒毎に去年の面影ひきのこまてをれ迷つれなれ望月の駒　定家
後後拾遺秋上
あふさかの関の板材をそ後海ふみあらもち月の駒　權中納言国信

風雅雜上
今もかはらぬ月のこまあふ坂の関はまれなり月の駒　權中納言公雄
新千載秋下
望月の駒引とまくるこまとれとはもうけちりき望月の駒　花山院

宮上川　出羽　最上郡

古今六帖歌枕名
をとはのたきはくるしき稲舟の浮るまもなくすぐる月かな
後撰恋四
もゝ上川源さゆもあくす稲舟のひかるくるしきかなるうれ　三条右大臣
千載雜下長寄
もゝ上川せゝの岩のとゞまるこまり　下畧　後頼

十飛峯　不見濱殿地

後後撰定家
もゝ上川人はくるしい舟のうてゆむ物とうき事　寂法法師
後古今冬
いか舟も絶引はへもゝ上川さゝはりれ時あるもとも　前内大臣基
新後撰雜中
いか舟もけかるまゝ上川さゝ計とうけと絶ぬん　菅原朝房卿
後千載夏
もゝ上川水のさまさゝそあり面のさゝ計もたれぬそ水　前関白太政大臣

後拾遺雜中
もゝしきにせのおくいおあのさけうとゝかはしまゝ　俊成

新千載恋三
もゝしきもゝしきと松むすりゝおれいおあのさけるを作く　鴨社夏

同
いとゝしきもゝ敷海おくかも上川さけるのいめとつれを　右原相如

新拾遺恋三
を上川人のむのいなあ舟もをすはりときうしれまん　有家

新後拾遺夏
もゝしきいなとをいおあのをゝしきるをひとゝみん　後鳥羽院下野

同
もゝしきのかゝもやゝぬいれ船のあゝををへ天おうゝ数　道日法師

門司関　豊前

金葉恋上
をゝとゝふりゝの笑守孝度う秋のきつらんひつゝゝ　丸浦

同雜上
分れうちも回ひとりゝおせうれてむ蛍をの道を泊つあ　内大臣家小大進

新勅撰雜四
をゝ秋の雲井れうゝもゝゝ八らひ浦を章のゝゝれ関ゝう　入道前大政太臣

をゝ秋をゝ

新後撰旅
数出くゝ百舟の波のゝち松おまををうとゝれ物ゆそをけゝ　如願法師

後千載旅
旅人のひけゝの道おをやゆきゝゆるをあをゝれ関守　藤覚法師

新後拾遺恋四
うをゝ後て海松中とをうをゝ玉章れりゝの関守　読人不知

藻塩浦　赤勘

後拾遺恋二
ゝゝををゝゝ初の浦れ夕煙ゝのなる時の思ひををまん　右原光俊

同　玉葉集及教

花衣のゝ(らく)を山に名ゝ色て紅葉れから月をなのめよ

粉川の観音の臺蓋法師ゝ岩ひゝ

瀬見小川　山城

新古今律祝　石ばしのやせ見えそめて川のそこよなれそなれる流とぞ聞　鴨長明

続古今賀　忘れぬも我世もつきぬ石川やせゝのかはのゆくすえとおもへば　鎌倉右大臣

井堰　同

当国所有之ゆゑ仍為可心得也

仁和寺門堰添の法師の例をもて井堰よりゆるす

新古今夏　さゝの山そゆるぎのり川のゆくすえの道迄をもとり　行平卿

続古今夏　今ぞ知るよしなくこめてとれ井川や行末の苗代をとり　法人不知

同雑中　せゝとかの波も岩うちこゆるぎをぬさゝの山の陰　後京極摂政前大臣

続千載雑中　今も猶みるさかのさしすゝ苗代まつすせゝる川の水　権中納言公雄

新続古今春上　春くれもちゝの花ゆゑ水ゆるぎ波をりかはよりの歌摘らん　家隆

後撰恋四
関越てあさつけ社のあさつとも清みるよ新城長孫 侯人不知

拾遺秋
あふ坂の関の清水そ新たなる年を経て今やひくらん 貫之

後拾遺恋一
逢坂はたゆるとも数まさりなまし関の清水に袖もぬれそり 伊勢

同恋三
あふ坂の関の清水や濁らんへいく人のうけのみしぬる 僧都滝教

金葉秋
門田の数ふるに関の清水の新めそ見ける 藤原隆経

千載旅
みるのの日も清水ふ前ふるとこそひの越しあふ坂の関 藤原範永

同
越て行友やまつむ相坂の関の清水そうけもなれる 大納言定房

同雑中
あさくしひ行逢坂はたゆる関の清水の今をそ見れうけそ遊しき 東三条院

後拾遺秋上
相坂の関の清水のなりをそ行くの月はうけをと見まし 孔雀

後後拾遺恋四
袖ぬれし関の清水の波も都て忘れぬあふさのやま 前大僧正実超

逢江

新後拾遺別
もろこしを行をくるも相坂の関の清水る新しをそ西ら 頓徳院

同
人も越ぬもと海らあふ坂の関を清水の宮ぬりをを 小式部内侍

新後古今秋上
相坂や清みにうつ新もみを実紙へたりるきら夏乃弱 源義将

関小河

金葉秋
嵩相山聚陸あふ市のの関はかはるけしきとを吹く 源俊頼

千載夏
夕市まは玉井はおもみしねとも関のかはの嵩乃浦しを 藤原道経

新勅撰恋四
浅くしう人もみる井実はの級はひをあしとそおりふ 兵部卿元良親王

同ヤ
実はの岩るとやくれ水浅を絶ぬへくはをみゆるむと 平中興女

勝多　長橋

同

新古今雑中
玉木乃板も海せりの成かりはく世をるむをを乃也橋 匡房

後後撰恋四
玉れかよをくを乃也橋はるを世中ふ位もわるらを 橘俊綱

新後撰春上
湖の海や霞てくれく春の日のよわされもまさしせたのも橋　為家
玉葉秋下
せゝらぎて後ゆく人ゝふみゝぬあとを夕旁深しせたのうの橋　左近大将実崇
風雅賀
はる風はなほうゝ水のあをなみのたゝ橋をとくるよ　兼盛
新拾遺雜上
はるゝ波やおもくみれば白ぬの雪をとけるせゝの岳ゝ　惟賢上人

藤河　義濃

古今太方歌あり
この〳〵国実の森は後をゝて恋ゝうしはゝへん万代までに　前関白左大臣
続古今賀
万代ゝつのをてうみん月も松をゝくむる国の森川　菅原為道
続拾遺雜上
つゝ色あゝ代〳〵の流をとゝふゝもゝの為ゝ敷実乃ゆゝ河
新後撰雜中
いゝふをゝん実の森は世ゝをゝてつゝへ〳〵迄ようゝ世おゝゝを　前大納言実家
続千載雜中
我さてゝを世ゝゝふゝゝをつゝへゝきゝ松来ゝ敷実れ森川　為世後西園寺入道
続後拾遺雜中
夕ゝ色ぬゝゝけ〳〵ゝ山のまつゝとゝはゝ色ぬ国の森川　前太政大臣

同
はゝゝあゝゝこの〳〵中山へたつゝも流れたゝそう実のゝゝち川　前参議為実
同
ゝり水乃ゝを思へつゝ色あゝゝゝゝ流れをゝ人のゆゝ川　入道前太政大臣
風雅雜下
神代ゝゝ道ゝゝ色ゝつゝへゝきゝ岩ゝもゝゝゝぬ実れ森は　光明峯寺入道前摂政
新千載釈教
教なゝゝぬ実乃ゝゝは漕舟れ法のゝめゝゝゝ世ゝ仕海一　左大臣法名雲禅
同雜中
迷ゝゝゝゝ法のゝ一一ゝゝ我ゝ世ゝゝゝと流ゝん国の森ゝは　為世
同
つゝへ緑ゝ色ゝゝゝなゝき世中ゝゝゝ川みてゝゝゝゝ国の森は　読人不知
同
れそゝ国の森は未ゝゝとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　一条内大臣
同
ゝゝゝゝゝ世ゝゝゝゝゝ逝て来ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　右大臣
新拾遺雜中
世ゝ後ぬ国の森川のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　前内大臣

炭竈里　山城

新後拾遺　右今上

よそそもそしとそそもそ大原や炭やとくめもそ竈乃里　土御門院

同

炭竈の煙と里乃ゐてゝ立てゝ霞るもそゝ小野の山下　坂原伊定

菅原　大和

新拾遺　足教

菅原やそゝしめゝ法乃法とめて又れとゝの手綾れ嘉れ　前大僧正良信

菅原伏見里

同

右今雜下

いそゝ家に我世そへゝん菅原や伏見の里乃道ゝくも物　淡人不知

後撰　恋六

菅原や伏見の里乃道しゝ人の迎もさしまき　同

同雜三

ゝゝ原や伏見れ者小ゝ波ゝ寄ゝ海のゝ小泊せの山　同

拾遺　恋五

忘しゝさゝとなくさめ面て菅原や伏見小ゝ忘れゝ物ゝ　源重之

千載　秋上

行となく相ゝ想しゝ菅原や伏見のさゝの秋のゆゝれ　源俊頼

同恋三
思ふよ世てれ契りとすう原やや伏見の里乃さぬのそう　俊成
新古今秋上
ぬめうう夜山さ一もう原やみてれちやの秋のちつの後　家隆
同秋下
夜うう者を拾ふすう原やみ一ちの後とくよおし一つ　慈円
後後撰恋三
すう原やみ一又月里のさく拾後もくくよのん免よく後　頓徳院
新後撰秋上
旁晴ろみ一ちのくれの秋風ふ月すされれ小泊瀬の山　前中納言有房
泊瀬小さ一てけるふ伏見のさとにやうて
玉葉旅
者ろそ伊ともなし小さ一れ伏見れ市とふそひ宿とて　能因法師
後千載夏
み狩ち一やすう一へもう原やみ一ちれちうのむう原の宮　定家
新拾遺春下
小初せや霞ふさのふ花れ多を後みの者う後なのむら春　後鳥羽院
同冬
里ちのぬ雪乃中にもう原や伏見の者し初うそひさき　後京極摂政前大臣
同雜上
明ふふ原や伏見れ四升ふ略うちなう　正三位李経

新後拾冬春上
もうう一や後見の者れ伊ろのれくれ山もちなすそうれ　教阿法師

菅田池　同　添上郡

千載恋四
恋とのくもをのされ池小ふ者ふくすまてやそうん小ろう　知一れ　待賢門院安芸

住吉　岸　巡　里　神　田　摂津

古今賀　又拾遺雜秋
住吉の松我れ我り後吹ろう小ふ者ろうそふれ沖ほ一ろう波　拾遺　祢恒
同雜上
住吉のさ一ふふ後ろうちくや後乃西ひち人史よく後　敏行
同恋五
久後も成ふりうれ住吉乃まつそうそう物ふそうそう　後人不知
同
住吉乃まつ拾ひち小成ぬれ共ふりのねふうぬ日長　兼覧王
同雜上
ちまみても久一も成ぬ住吉の者れ時松ちくふ後ねうく　後人不知
同
住吉れさ一れ時松人ちをいくふのひ史とそま一物と　同
同
住吉と海士ちくくもも色吉それ人長者行ふやいふる　忠峯

同墨滅
道しらはつみにもゆかん住江のきしにおふてふこひわすれ草　貫之

後撰春上
春深き色にもあるかな住江乃底もみどりに見ゆる浜まつ　読人不知

同恋一
住吉の岸に白波よるよるは蜑乃よそめにみるそ悲しき　同

同
住吉のわの力まつをこそ千年に生ふる松より外のなにと見ましや　同

同
白波乃よるくる岸に立よりて我をみしをそ住吉の松　同

同恋二
住吉の波にはあらぬねとよもしせまほしきと思ふよそを浪るゝかれ　貫之

同
よそにのみ松はつらきに住江のゆきてみまくほしくなれ　延喜御製

同
住江の松にたちよる白波のかへるをりにやねをはなくらん　忠岑

同
久しくも恋わたるかな住江のきしに年ふる松ならなくに　源すくろ俊

同恋四
住吉乃岸にきてよする沖つ波まなくかけても思ほゆる哉　読人不知

同恋一
住江のめには近のきしにゐて波乃数をも読へて過ぬ　伊勢

同恋六
我ならぬ人住江の岸に出て難波の方をうらみつるかな　源とゝのふ整

同雑一
住吉はきしせつらし沖津波たえて打けん浦もなくとも　元輔

同雑三
なゝねにあらぬ身なれは住吉はきしにもよする浪や思らん　読人不知

拾遺夏
住吉のきしのふちなみわか宿の松の梢に色はまさらし　平兼盛

同物名
住吉乃岸の松の下しつれを海をふかせいかに蓑しきし　すけみ

同雑上
ちゝ乃ゝ宮波をかけつゝ住吉乃松の千年をとらふこゝろうれ　貫之

同
うらしれひいさ住江の忘れ草忘れて人の又や忘れぬと　読人不知

同
世中は住よしとしも思ぬに何をまつとてわか身へぬらん　同

同雑下
都しらて住わひはてゝ津國の住よしときく里へゆかん　忠見

同神楽
住吉乃岸もせさらん物ゆゑにねたくや人にまつといはれん　住吉明神

同
天下はあらん人神のあひせを思へはひさし住よしのまつ　安法法師

同　我とて祈代の事もこたへすんむりとおもはる住吉の松　恵慶法師

同恋一　色事とはつりて年のへぬるかなあふをまつ住江ふせぬりのゆへ　読人不知

同恋二　思ひつゝ思へもうらし住江の松のねぬるまもなくやなる　同

同　住吉の松はなゝねとも久しくをもとねぬよの成ぬるかな　大納言きよう女

同　久敷もおもかしゑとも住よし此松や二度生うせ原らん

同恋三　住吉の岸と思おかぬ里海さをの川ありとをもあしぬ恋哉　柿本人丸

同恋四　をゝこゝろ此あゝ人祈よりのひてもをもゝ思ひとそをく　読人不知

同　住よしのきをふせゝ思ふ苔むしやあゝまし恋をもぬせ　同

同恋五　をもへよりしのきをよ向へ祈浦鴻哉と恋とをぬ日うなき　人麿

後拾遺春下　すゝの江乃松乃緑も豈此よりよりてはゝ枝をきれき乃ゆらなき　読人不知

同賀　すゝゝよりの濤の色もと法あ為て波の松此住とゝそゝあ　元輔

同恋三　恋ゝ思ふ邪波のゝとも松もゝ住吉の松と云らん　大江匡衡

同　をゝ恋乃為ゝ松乃中にすゝゝ此の松乃ゝ独孫なるうれ　津守国基

同雜三　聚すゝゝ乃中にすゝゝ此の松乃ゝ独孫なるうれ　相模

同四　すゝゝよりの此松を恋と思らん此き身をゝ作てきゝ連は　三条院

同　沖津風吹ゝ寄しをふすゝゝの松の志乃ゝ恋とあ為ふ白波　民部卿信理

同　住よりの此濤風いゝゝ吹ゝゝ打波の群ゝ恋ゝ為ゝ　東塞法師

同　松これはゝゝ物とをゝの江の乃のなゝ波の志乃ゝ為ゝ　菅原為長

同　恋ゝ為の摘て海らんをゝゝのゝゝゝの世を思出もなゝ　平棟仲

同　をゝ事ゝを恋らん住よ乃ゝ白波たゝ世なりとも　源頼実

同　をゝ乃ゝを つ家の恋を住江の神さひろゝ松根ゝ　増基法師

同　恋てをゝゝ敷ぬをゝゝのまつこれ波ゝ為ゝ　赤染衛門

同神祇
住吉の松ゆく人のたむけなるを何の昔のあとかはらし　山口重如

同
住吉乃松の志け枝も神さひてことゝはゝやあ昔の玉垣　連仲法師

石清水より　すみて待ける女の松の木の下かけ

住吉の松をいはひて待たれる神乃杉もかくれ
けて待ける

同
ゆきもかへる若菜つみける住よしの松行人へ抜ふ成にけるかな　読人不知

金葉春
住江の松のしけれる数の君のため代は待れやれ君かかれらん　孔季

同賀
君の代の神をそしして住吉の松とちしと思ひけるかな　経信

同雑上
いくかへり咲けん住吉の松も神代のことを知るらん　俊頼

同
住吉の松りひさてたのまれる数波の事も忘すらるらう　賀茂成助

同連歌
流うとみ逢ても忍島かな　頼算法師
さもあらはあれ住江なる人のことせに　読人不知

詞花賀
色かへぬ神もとを待けとしよりそ千世そのさえむ住吉の松　能宣

同
君か代のひさしかるへきためしにや神もうゑけん住吉の松　読人不知

同
住よしのあら人神の久しくも松も幾たひ生かはるらん　経信

同別
今年ゆそ老へきさん住吉の待へうかうつくし老かな　津守国基

同雑上
住よしの細江にさせる澪標深きにまけぬ人はあらしな　相摸

同
すみよしの波にひたれる松よりも神のしるしそあらはれにける　式部大輔資業

同雑下
としことの春にあはれと住吉乃まつむしやなくしるらむ　孔輔

千載旅
住江に待らんやとのとかたいつくしくにかはしと聞るかな　津守有基

同雑上
人しあらはすみよしの松乃氣いかはかりのけ数へしらむ　津守のうけもと

同神祇
住よしの波もむかしをかくれ給へる汀にたまるらけり　大納言経輔

同
流水ありめくる方もも住吉の松さえ年をもあはれなるらん　俊成

国立公文書館
National Archives of Japan

同
古にける松にとはまし昔もかくや住乃江の月 右大臣

同
住よしの松のゆきあひのひまよりも月さえぬれば霜は置きけり 俊恵法師

新古今秋上
月をみて浅ぬ末のさも住吉の松風清くして秋の夜ぞ吹 寂蓮

同賀
住吉の濱乃まさごをふむたつは久しき跡をとむるなりけり 伊勢

同
住江に生そふ松の枝ごとに君が千年の数ぞこもれる 前大納言隆国

同
我道をまもらば君を守らなんよはひはゆづれ住よしの松 定家

同恋五
すみよしの恋忘草たねたえてなき世にあへる我ぞかなしき 藤原元真

同雑中
都人こむもしとも住吉の里にとのゐを松もしりなん 後冷泉院

同
住吉乃松をまつともかはらで君がちとせの影ぞこひしき 大弐三位

同雑中
数ならで世に住江のみをつくしいつを待つともなき身なりけり 俊頼

同
うきことのつくしもしぞ世をば思ふにきる衣やかへし住吉のまつ 俊成

同神祇
よや寒き衣やうすきかたそぎのゆきあひのまより霜やおくらん 住吉御哥

同
いかばかり年はへぬともすみよしの松ぞ二たび生かはりぬる
あの年にあら人をうらしまうでてくんかなる
とそましりの我すみの江の松をみてたひたびのを
我らんと浮てまけりつ給地事しとまん行くへろ

同
むつましと君は白浪みづがきの久しき世よりいはひそめてき 住吉御哥

同
住吉乃濱松が枝に風吹ば波の白ゆふかけぬ間ぞなき 藤原道経

同
住吉と思ひし君を遠ざかり神の庭しば待とぞしまる 津守有基

新勅撰春上
住よしの松のあらしも霞むなり遠里をのの春の明ぼの 覚延法師

同恋一
いとへとも猶住江の浦によるをも綱のめしげき恋もするかな 読人不知

同恋二
住吉のちぎのかたそぎ我すまひやあはで経ぬ幾年のへぬらん 藤原為忠

同雜

いと海あらくひろひよゆん住江の岸ふく風に見人不知

同

をとこうの月明の月夜舟まちけるとて　和泉式部

同

住吉の浦小波あらくたつ波うつ時の花とさかりきる　一条右大臣

後撰撰秋上

住吉の松のうもとのひくきてをのかの秋の發る時　後徳大寺左大臣

同神祇

住吉の松のひとあらかの波よ初るは新きちよを待ら　定家

同

松のひとう波こそうの文あのの門住吉と迄とられぬん　前大政大臣

摂三家院住吉の御幸の時きの日よみ侍ける

同

右も今日の御幸のためとてやもとさりのん住吉のこ　大宰權帥伊房

同

いろかりの花幸を住吉の松のう花咲たひとうみを　千時參議太宰大貳実政

同

住吉の松の下枝ハ神さひてゆふしてのるる沖つ白なを　千時左中將前大納言光顕

同

行末ものきらを云を住吉の松よりくの代のをのへゆるん　鎌倉右大臣

同

叮こうきの行あひ乃者乃いくこうの契の結ん住吉のまつ　後鳥羽院

同

神代より植始めをん住吉乃松たちをせや限らされらん　亘秋門院丹後

同

辺こそ行く神やうくりん住吉の松まつ乃緑を替ろ世もなし　權少僧都珍覚

後古今夏

夏のあつ雨やあめの部ひら月をとをぬすこうのちや　津守国平

同神祇

西乃海やあしきの原の塩ちうの別れ神住うれのこ　卜部兼直

同

古後を一末とふみよ住ようの神よ昔と忘れまそをを　兵部卿隆親

同

住吉や神乃三宝のゆふなまひかものくのうらをもうれ　中納言

同

住吉の岸のミ川の式神さひてそれよをちうぬ松れ多神　衣笠前内大臣

同

今日や又又にちとせを契らん君よこうをみうのまり　前大政大臣

同

神よ神祇をこうとみそれをせ世の世よりの文祇や　太上天皇光明峯寺入道

同恋二

住吉れ千木の叮こうれ年をてまさ行あひもぬ逢うれ　前摂政左大臣

同雑中
いけのうきたちけるまろとを苔なれ位古れまろうへてみよ　清少納言
同
こけ汐もさしへ来るまてく今そうなる位古れ松　太上天皇
同雑下
位ふりと後ひをさし滝なるんさひしうとる松の風哉　右原基兄
後拾遺夏
あちろ鴻白毎すし位古のうるれむうひ水叩く村くも　前内大臣基
同雑春
位古乃松のえけ乃春乃あ叩くくうなとをうけて咲らん　登覚法親王
同恋五
波ともいくよになりぬ位古の松をうれるまなよ恋しく　中原行範
同神祇
位ふ山れ演松うも乃後ふもりかのつみ海乃荒れゆ山して　後徳大寺左大臣法性寺入道前関白太政大臣
同
波なても白ゆふくろ位ふ乃ふつこう神乃掛るとられ　西行
同
位古の松りひあ〜ふ波れ多ると掛りの叩く社神つもう波　前大納言良教
同
位古乃さ〜叩ろ逢さ松うひお神代をうけてよすう白浪　津守国平
同
ちとんふもの松ふ波ひと云乗に初る恵と神やうけあん

同
位古の岩ふ心とと見つ来はちとせをそふれ浦幸なるセ　権大納言長家
新後撰秋下
位江の月ろ神代乃事とへ人をつの掛ろ秋風ろ吹　家隆
同旅
ちとこ〜の松の岩神と松すてしをれの浦れ月ろ見るか　後徳大寺左大臣
同神祇
位古の浦ちの松乃深こうろ久しうれとや神もうへ乃ん　宗尊親王
同
いくえろ波の白ゆふうけつん神さひよまる位ろれ松　俊成
同
位ふ〜の浦の松の是年とて神さひまされ風れ音の松　前大納言經任
同
世こ絶ぬ道ふ作多ても位古乃松とそあふく松む新とて　法眼慶円
同
和ふのうふれ道をを拓ぬ神なれ新とうけふ位ろ乃浦　俊成
同恋二
位ふ〜の神に初〜ふ事のまいも久〜く成ふけろ神　小侍従
同恋三
位ふ〜乃岸のあ〜浦うけてふ豆松く来ちとをこれ　権中納言經平
同雑上
位古の松吹風もろ〜ねをこ〜うつ波やむ〜なろん　如覚法師

同
住江やふるきのはまと待そてしそ神も千年の松をまさきかん　前左兵衛督為教

同
住吉の松のちとせも治まれるきみの為とや神も祈らん　山本入道前太政大臣

同
千代とも祈るたましの三家をいはひやゆく住吉の海つ　常盤井入道前太政大臣

同
あらはれし松も花咲御代にあひてすめる敷島の道　太政大臣権中納言為藤

同
松ひとよ神代もさきや天原そへらも住江の月　俊成

同
すみよしの波のまつ乃葉なるや人めをてかけてまく浪を　源兼氏

同恋五
忘草つみてもかひそ住吉のさしもかく神をかけれけれ　俊成

同
いつれとも知らぬ住江の草の名におもひなしてや人のたれ　典侍親子

同雑上
すみよしの岸の出羽に生かる乃緑をまつのよや見ん　太宰権帥為経

続後拾遺春下
玉津島の浦のさらまへよしのまけに花咲春の夜　為家

同夏
住吉の松とまもすや子規きこゆる波のよるもなかまん　平忠盛

玉葉賀
行末のひさしき御世をかくる海までも近し住吉の松　平時廣

同旅
まだしらぬ敷浪の浦のとまやかけしれりまや住よしの浦　祭主輔親

同雑五
すみよしの松のむかしも忘れすとかはらぬ御代に恥ぬ敷島乃みち　左近中将為定

同神祇
神し代の御諸にゆつれ住吉乃神のまくなき松のちとせを　入道前太政大臣

同
しき浪にたのみをかけし住吉のまつもや今は思ふらん　俊成

續千載夏
宮人はちよのみどりのかけそへて今日住吉の松枝見ましや　従二位朝子

同
すみの江乃松しひさしき御代を千代重てのく一しほもみれ　式乾門院御匣

同秋下
住江乃まつの秋風音信てそよかりし夜半の月かけ　為氏

同
住吉の松もかはらず古めかれとは思へ秋のよの月　西園寺入道前太政大臣

同神祇
治まれる神代よりこそ住吉の松もちとせを色はかはらじ　後嵯峨院

同
いく千代とも末を契らんきこゆるまつの住吉の海つ　太宰権帥為経

同冬
住吉はまつかぜ雪のうへよりはやく沖い波風　後鳥羽院御内
同恋四
恋ませとしきあし住江のたつもうひなくれもうゆる物　女院歌子女王
同社頃
住吉のたつとやてし年ふれとうろ色盛のみとそ見ね　度資王母
同
すみよしの春の姫松及に出くちう千年とみゆる色ふかし　土御門院右大臣
同
志賀の浦とそみち住吉の松吹風もなとけうとうろ　前大納言經房
同
わつとうろ神そひまきされ住吉はまたうき松はなかはて　津守国基
同
文程ふかし松立て我出るいく代へゆらん住吉の神　莫濟
同
住吉のきしなる葉をたろとも神よむかしの波を忘れか　平時香
同
守るなる神ふけても住江のなこりを道と思ひやそせむ　津守国道
八雑秋下
住吉の神乃御前の演きよとこ働ちもはれさやけき　前参詳俊言
同雑上
松うけの水きよいまそ住吉の岸のうへ岡ふる雨とうや　安倍宗長

同雑中
うれ出くむこれ海ちうこ波をしなとみうの住吉の松　筑三位行尹
同社頃
なつふさてもはろふはくいにしへの風を伝せる住吉の松　前大納言為兼
同
我恋とるらぬ神も哀れとも代のあり世をこ吉の松　津守国夏
新三載社頃
古ふきろ江と弱く住江はしゆきうさなるをふみも見ず　為兼
同
住吉の松は云葉うるもを神代うはれ一夜一夜乃みち　菅原長秀
明恋五
住うは岸ふをあうて忘ぬいうち人のうきよせらん　淡人不知
同
拾遺只うは住江乃文をきぬつ〻さ計乃苔のふもう　為相
同雑一
立波はさつもうひあま住うのきし方をふ江は白浪　菅原秀經
新拾遺春上
むくれをさ〻うつ波をもふて霞のくれる住吉乃つ　赤陽門院越前
同賀
志の代をふうの指は始うう神さひよろをこうの松　法成寺入道前
同
志の代へ八十鴻うるる波の音よ風をけのなる住吉は松　政大臣西園寺入道前大政大臣

同哀傷
むき世乃ためしと思ひし住江の松は煙となりける悲しき　藤義公

同恋三
行あらん程をこえ急き住吉乃松の後まの千本のかくそさき　土御門院

同祝
あらへむ世にもこえけりすみよしの岸に波たつ松は秋風　伊勢大輔

同
住江は八十嶋かけてくる人や松をとなたの友とみる覧　権大納言隆季

同
君か事もなくさむ道乃たつ人にや世に住吉と天くたるらん　定家

同
住吉の松にましはる玉垣乃あけをことりをたてへ行かな　平政村

同
ゆく世よりの神乃宮井乃成やらん古て久しき住吉はまつ　為家

同
あらましはむのうらの白菊まつと志りすや住吉の神　為相

同雑中
敷嶋乃道をさみらと才かつすむ世は住吉の神なるらし神　法印雲禅

新後拾遺春下
住吉の松とかのつは思ふらのもみちに汐のしけりかん　忠見

かゝりてはみるかわまつみよしの岸の数浪打ぬつくらう　平兼盛

同冬
淡路嶋むかひの雲の村時雨染も及たぬすみよしの松　定家

同
住吉乃千本の松そうきまもあくて霜雪ふる冬そきこゆる　俊頼

同雑秋
松はのこる春をひくさて住吉の岸の園の紅なきは秋風そ吹　前中納言公勝

同別
数ならも色ゆかさも住吉の松乃みちひと行へしめや　大納言経信

同恋五
今更思ふと思ひ住吉はまし幾そなる中のゆくひち　源義将朝臣

同雑上
物をれこれひらあれ住吉乃浦より出れあそちし風やさ　津守国冬

同祝
聞けりしも乃汐ちそ知ねとも今住吉のうらの松そ見　為重

同
橋の小戸は湿瀬にあらまさてむかしかけ神乃代神　津守国量

同
住吉の松のむかしさつくう波かくむかしは見帰らん　藤原敏行

新続古今春下
り春の名残を思ふ住江乃岸は数波今やゆくらん　式乾門院御匣

同
あまさも又神や植けん住吉の松はむかしの数なき　前大僧正禅守

同秋上　仲つ海いく秋りをて住吉の松のたつ見かは月をよをそらん　源俊頼

同　月新乃者もつきものうゝ因ゆ秋れ秋をしすをよりけるつ　左大臣

同秋下　海とのそうらうゝ西れ住吉乃春に波まる白菊のちれ　坂上是則

同賀　住吉の松も者乃二祭ゝうゝしゝ千年れたゝ〳〵ゆそひく　法徳寺左大臣

同　住江の濱の海さこれ萬古て岩となりむ程ゝう思へ　元輔

同　思氏ゝうゝ西てうゝけゝる住吉のまつ吹風い来もまれ　慈鎮

同　松ゝけゝう変世れ住吉のゝ久しゝ天世とそ思そみゝへゝ　中納言国信

同旅　海ゝゝとゆふむもとゝくまゝる波れのなゝ波れ去のへ秋霧　祝部成仲

同恋二　海ゝゝの松を秋るものひなれゝゝゆをたけれ逢三者　盛覚法親王

同雜上　海ゝゝ乃沖つ塩あひをみをゝ乃て霞ゝ入ゝ浦路遥山　四辻人道前左大臣

同　あをゝ波のまゝふく者もゝゝをひて秋もむや住江れ月　宝寿院信仰

同雜中　住吉の松れを月乃沖つ波いくゝをひをあをれゝをを　式部卿邦有親王家小将

同雜部　住吉といまをたのまゝ波国れゝををたゝくゝ不るゝゝ　茲原朝家

同述懐　住吉乃松をたあををゝゝめや二代の江に海ゝゝ波　亀山院

同　君ゝのゝみをゝゝゝゝを年ゝゝて三代ゝあひゝる住吉の松　為世

同　あをゝをををこをすゝをもひゝをを海ゝゝ守を住吉れ松　等持院贈左大臣

同　をゝを世をゝ秋ゝゝ事も住吉のゝ月程ひをゝ成をゝゝれ　成恩寺関白左大臣

同　住江ゝ秋をひゝゝ松ゝれを波をゝれゝゆゝををゝ西　俊頼

同　秋ゝゝ者て深ゝゝ秋住江れ君ゝゝ秋ゝ秋ゝ者て　庫守国道

同　わゝゝををゝゝを世ゝ秋ゝゝゝゝ深ゝゝて秋む住吉の秋　雅永卿

陸奥

古今恋四　浦風　上野　同

をを海れ望の塩焼煙風ゝ秋いゝをを思ゝゝ方ゝゝ引ゝゝ　俊人不知

同恋五
とまの塩れ塩焼衣れさとあ〜こそ人をこのわまや魚こさまさこぬ　同

同雑下
わくらもかやふんあ〜ふをまの浦か藻塩〜れつ俺と者よ　行平

後撰恋四
こうこも海の浦の白波ちはやとをなく海松ひろひを　俊人不知

同
風波ひろみくゆる海れ玉ゆくを形こつる海の浦ろ走〜き　貫之

拾遺雑上
白波をたて〜空衣かぞ〜をぬろ石もを海もとれう浦く　人丸

同雑秋
藻塩焼ゆふかおくも海乃煙ち秋夕雲もりうすやうた　俊人不知

後拾遺旅
すまの浦波今日ひとあ〜あへ海松流ゆやこと流ま　能宣

同恋二
すまの蜑の浦漕舟の泊もなくこぬ人ろ恋ゆ我や何なろ　西宮前左大臣

同雑四
玉ゆかも塩の煙後ひ〜ゆもをすまのう〜北　菅原經衡

金葉冬
浜路鴨あふ島乃なく群にひくゆねさめぬをまれ関守　源兼昌

同恋上
思ひやれをまのう〜みて孫たろうの行数神かろ浦と　太宰大貳長実

同恋下
人をまをを恋ち〜をまの浦人をそうあ塩〜れてをあすやろ　師時

詞花夏
りしかを焼を海乃浦人おをへていこひやをんあ月雨乃空　通俊

同雑上
をまの浦ふやく塩う海のろろう春ふ霞れぬ霞やろれ　俊頼

千載夏
又月海をあくも乃煙おをあを塩〜れをさを海のう〜人　俊成

同秋下
山下風ふう〜結ひすろもみちおつ〜をすを海の関守　右大臣

同冬
すまの笑をぬのをに海千島ひろ〜ぬくゆをもなをもをこや　俊成

同旅
ろろ海ちやをまれ笑やの板庇月りれとそやろ〜塩焼　中納言師俊

同
神の上にをぬれ月をんまーやをまの関やふ者〜をこをを〜　国信

同
ひもひくをぬれ月の明ふを塩やうれ〜入をまれ笑守　法眼兼覚

同
掛けすをまの浦ちのをよ千島ろう神の波をりをれ　家隆

同雑上
ををを浦をまの月よめをを夢て海の浦ふ雪塩ふろり　前参議親隆

同
しつた浮すまの暁すなてなみ波をこえ波たゝぬ朝の物にそありける　権中納言実宗

新古今恋
すまの蜑乃波かけ衣よそにのみきくは我身になりにける哉　道信朝臣

同
すまの浦にあまのこりつむ藻塩木のからくも下にもえわたるかな　藤原清正

同恋二
忘なくよすまの浦人藻塩たれほさぬ袖の果をとへとや　摂政太政大臣

同
すまのあまの袖に吹こす汐風のなるとはすれと手にもたまらす　定家

同恋三
別りを世にかれぬやすまの蜑の塩焼煙むなしかるらん　女御徽子女王

同五
白波もたちゐくたけてすまのの浦のみるめも刈んとそ思ふ　読人不知

同雑上
藻塩汲袖の月影おのつからよそにあかさぬすまの浦人　定家

同中
すまの浦の浪にしほるゝ袖はかり何にぬれけむ蜑乃釣舟　藤原孝善

同
秋風の関吹こゆるたひことに声うちそふるすまの浦浪　壬生忠見

同
すまの関夢をとをさぬ波の音を思ひもよらてやとをかりける　慈円

新勅撰秋上
すまの蜑の袖のむよやさむからん風まつ月もたちかへるらん　家隆

同
藻塩やく煙も霧に埋もれぬすまの関やの秋の夕くれ　慈円

同冬
すま海乃浦に秋をとゝめぬ関守も残る霜よの月をみるらん　藤原信実

同恋二
うらむへき忍ひしらすやすまの浦に焼塩のからの煙なる絲へ　権中納言国信

同恋三
忘なんすまの浦の塩ひにあまも刈斎こにうつて袖ぬれぬらし　権中納言長方

同雑三
わか身にも秋さへすまの浦のやく塩からくも煙にもとられけり　国信

続後撰恋上
すまの浦の塩やく煙春くれはそらに霞の色やたつらん　大納言延光

同恋中
すまの浦のなきさもえらぬ夕霧に絶く思ひのあまの漁火　後京極摂政前太政大臣

同
秋の夜ゝすまの関守位の色て月やゆきゝの人とかむらん　右衛門督通成

同
すまの蜑の塩なれ衣秋かしやさそふ音も秋のよの月　源俊平

同
ゆくへりすまの浦人秋ためは秋ともなしの月をみるらん　後堀河院民部卿典侍

同恋二
ながめやる　まきの浦なる　塩竈の　煙を神の　なびくころかな　藤原安嘉門院

続古今秋上
いのちなる　まきの葉ごとに　置く露の　明るを待つ　浦の朝風　前大納言忠良

同秋下
八重がきの　まきの島屋の　塩やき衣　おもかげ　月花門院

同
まきの葉の　もみぢの錦　なびけ　秋の風　雲の　月花門院

同旅
たひ人も　袖ふりはへて　過ぎぬ　関の戸　明くる　行平

まきの馬屋うた

同
浦風の　はげしかりけり　ふかれ　ぬる　太宰大貳高遠

同恋
まきの浦の　ひるの　海人の　袖ぬれ　ぬ　海人知

同雜中
まきの葉の　浦漕舟の　梶を　絶へ　小野小町

同
海千島　江をみるかな　神なれて　月花門院

同
今夏　まきの浦の　ちのも　塩竈の　くゆる　神うれ　藤原道前大政大臣

続拾遺秋下
まきの浦や　関の　かりの　秋の　為氏

新後撰秋下
塩風の　はげしかりけり　秋の　津守国冬

同
塩焼煙　たてうすきの　墨の　神ゆ　定家

同冬
まとろまぬ　すまの関　明ぬ　新枕　時雨

同
ぬる浮　てーやみ　ぬ　まきの　俊成

同
まの海の　夜明　月　千島

同
さゆ　まきの浦　千島　入道二品親王　性助法三位　為継

新後撰恋二
をれつつ　まきの葉の　塩焼　少将内侍

同又玉葉恋二
まきの墨　塩　神　平長時

同
まきの浦の　余　塩やき　人　定家

玉葉秋下
まきの浦や　天　江　波　光明峯寺入道前摂政左大臣

同
も塩尻も月のよはをたきそへて煙ぞたてうとまれ海人　權中納言実衡

同
漕出るとまのよ舟のまををさをさかうゝ月のうけれもゝ波　前參議為相女

同冬
浜路鴻もあかつかの月かうつれ浮寝もまの関やはの海きよそ　家隆

同
うゝ松乃もあゝ月のつゆよちりつゆかふすまの暁　二品法親王守覺

同
とれまゝふ事の海てちんゆゝ千島まの浦孫は相や思と　後京極摂政前太政大臣

同旅
浮寝うれるゝ鶴ねをよなきわゝん名波ふゝうすまの浦浪　行平

同
月新と神ふゝ為てもみ浦ゝうれをまれ浦孫の為明の浪　実為鎮

同雜一
秋深く成りまの海の浦風ゝ寒守人やよさむなるらん　平宣時

後千載秋下
よをなりまの海の塩人今ゝりや風ふゝ吹みて夜ゝうらん　入道前大政大臣

同冬
藻塩焼煙と思のたゝりて時雨ゝといゝすの海れ浦り焼　宗尊親王

同旅
をりゝまりまの関屋の板ひゝ明り月も光ゝ見ゝり　定家

同恋三
すまの塩やきむをれまのゝをまてもゝゝ神の波ふ　光明峯寺入道前摂政左大臣

同恋四
ふれしれあ月乃を塩ふ焼ゝ煙そのまゝに憂なれゝゝ恋の月　平時元

同雜上
とまれ塩乃を塩れ煙そのまゝに憂なれゝゝ恋の月　大江宗秀

後拾遺物名
すの海の浦や浜ゝ塩ゝ焼ゝ松ゝ波乃ゝゝ見ぬ日ゝ恋れ　俊頼

同旅
掘ねすゝ蓑ちやゝゝしぬまゝの関のゝふ千鳥れ暁乃ゝ色　定家

風雅雜上
とまの浦やはちの末ゝ寄れ夕日ゝ沈ゝ浜路山　菅原実泰

新千載秋上
ゝさてゝゝうみるへゝゝれまの海の塩乃月新　伏見院

同
和田原月ゝ塩のいやまゝふ光ゝまさをまのゝ波　西園寺入道前太政大臣

同
ひゝゝまの関守を孫しゝゝひゝく毎れ秋の月新　津守国道

同旅
新里ふまれ関ちの梶枕蓑とち紙をゝのるもゝれ　法下宗昭

同
浪ゝけぬまの上野のおゝふふと塩たれゝ掘安ゝれ　淨阿法師

同恋四
いろにをんなにこるまを海の浦風よくゆふ煙乃むせをりくれ行　後鳥羽院

同恋三
分わけぬ思ひ絶をまれ関すへくへくよむとふ〳〵とむらん　定家

同恋五
をまの塩の塩焼衣そ遠ふりもうゝむら神をれうへのぬ　後伏見院

新拾遺秋上
をまの海の神ゝ訓ゝ浦風も秋とや今和を吹替れらん　贈従三位為子

同旅
分わそ志むひくゝ所のよをを又狐ねたひねをまの浦風　同

同恋五
をまれ堂の塩乃遠わをまそ成もうゝそやをは　後西園寺入道前太政大臣

同雑上　又新後拾遺冬
ゝけて移ぬをまの関守よや寄をなゝふ千多月乃明るを　摂大納言義詮

同初句
をを海乃浦波の名やの明れゝ焼塩とけさゝけゝふ里乃　入道二品親王性助

新後拾遺秋上
ちこむ乃関ちををぬ夕寄乃なをゝ吹こゆゝす海の秋乃夜　後成女

同秋下
めゝうれてゝと浦るゝ出れもゝ乃れ字ねゝの満れ月乃　前中納言基成

同旅
をゝぬの新ををゝ乃さうをまて独涙くゝ乃ゝを乃ゝう〳〵舟　崇賢門院

同恋一
人をまををゝこゝをを海ゝ焼塩乃煙をゝ乃ををひせひつ　祝部行茂

同恋一
すまれゝ乃の塩ゝれ衣打ぬ海やゝ寄ゝ乃ををゝつらん　入道二品親王守道

同恋五
をを海の衣乃塩焼衣ゝ〳〵ゝひゝ乃ををゝ乃ゝ神ゝれ　紀俊長

新後拾遺秋上
をゝの堂の心や月ゝなひくらん焼ゝよする浦乃塩乃ゝ　前参議雅有

同秋下
宮守もゝ乃ぬゝ袖に秋くれて玉明の月れをまの浦なを　前中納言為秀

同冬
をゝ波乃を乃吹こゆゝ寄ゝて雪ゝを送れをまの浦ゝを　後三条入道前大政大臣女

同恋一
なひゝをゝ寄ゝ乃ゝふをんゝとゝを海乃堂れ焼りの煙おひをを　前参政左大臣

同
ゝ海れ堂ゝあゝ寄乃ゝ乃ゝつをゝて神ゝ乃ゝ俗と善ゝふせん　源備弥

須佐入江

攝津

後百今冬
をゝくれをまをゝの入江の蘆ゝをぬも風をゝしつゝぬふ乃ゝ　摂大納言孫雅

後拾遺冬
ゝと寄みをまゝの入江ふをちゝ氷ゝ月ゝ明るゝ　摂津師公猷

同恋二
風あらくさとさの入江よ波越てあちこちなきをぬるゝ袖哉　當盛朴入道前太政大臣

後拾遺恋四
見わたしぬるをちの入江みるうら波のうへにや人うら恋ら　登蓮法師

鈴鹿　山河風　伊勢

後撰恋三
まくの山いせ方の望乃旅寝慣れぬまと人やそるらん　さの朝臣

同恋六
ゐるもせす成も行ぬすゝの山こゑてふ名乃高くたゝく　後人不知

同
越ぬてふ名それ服ろすゝの山いとゝ迷くなりぬと思と　同

拾遺雑上
とゝ事なりといふなるまくの山越て嶮きさゝのひとそ安　行製

同
世よ人れを又も越るまくの山昔の今よなるやうを　要宮女御

金葉冬
行世月時雨の雨れあらまくよ成まくの山うれ　摂政家三河

同雑上
とやくとう行波ゝまくの波思ふことなる言う安ゆる　六条右大臣北方

詞花夏
ゆすゐの日をなまくよ鈴鹿の八十瀬の波う言まさをを　皇太后宮院伯部

千載冬
ふるまくに迷ぬ袖ぬれまくの山雪ふ実の中ゝ山せけ　内大臣

新古今秋下
すくの浮き本葉ゝ日数ゐて山田乃原の河ゐとそ安　大上天皇

同雑中
鈴鹿山うゑ世をとよ和に山ゐ捨て山ゐ成行ぬ為ならん　西行法師

新勅撰夏
ゆう初てゝくゝふ成ぬ鈴鹿の山のやうせもしぬ為ゐの法　後成

同
尉文群行のすゝれ形文ゝ撰の方ゝ九行多れ

同旅
急ぬをふをとゐらんたひ孫する弟乃刈ゝ葉為ゝ　權中納言通俊

同補
秋浮く成ふ成ふ成まくの山葉を為とゆうまのひ行く　後京極摂政前太政大臣

新後撰補
まくの川ゆうさあをれ補ち山掛ゝ行ゝ行ゝ　大蔵卿有家

後白今旅
鈴鹿八十瀬わゝふゝすゝの波首ふなれと巨やをする　武乾門院伊遠

同雑中
まくのほわゝ力ゆゆゆる老の波八十もをくゆゆ神行　正三位知家

後拾遺雑
七十れをゆくまくにすをうゆ川ゆ乃波ゆうけう世しを　前大僧正隆弁
同
ぬつをしへてゆくうゆれをくう山越ゆ人ふゆ信はとも　小弁
新後撰春下
しうをきぬをや於康乃関なしん招拾ゆをき光の陰の秋　定家
玉葉恋三
おなをぬ力をゆうれをくゆ山とをぬよ行乃者をとををん　小馬命婦

野辺ゆ出波ふとて

同雑二
をくゆ波八十せの波をゆもをて波らぬ袖乃ぬ秋く法ゆ　孕子内親王
後千載夏
をくゆ山明ゆをちゆを天のやをふを世くなく弗ゆれ　前参議雅有
風雅秋下
下波乃袋をくをなゆをくゆ山ゆ面れいくくふを世成し　能宣卿
新千載神祇
をすゆ山今宮越て思ゆ事なゆもなゆをを神ゆ祈ゆむ　右原朝村
同
於康山八十せの波の玉井ゆも我乃ゆの世をを祈ゆを　院ゆ製
新拾遺旅
ふを世て波ゆを越ん於康山関やをゆの月も宇ゆ　荒木田氏忠

同神祇
神代ゆいくをゆ川ゆ乃波の秋のゆの月　源兼氏
新後拾遺雑春
於康波ゆぬ波もゆゆを於康波ゆ八十せの波乃秋のゆの月　橘遠村
新後拾遺恋四
すゆの波ゆを波を波へを世て於康を恋ゆ波代ゆれ　駿酬入道大政大臣
同旅
をくゆ山濯波ゆ宇越ていくゆふゆをぬゆゆ所をの宇　祖月行所
同雑上
をくゆ波氷やをを世と波ぬん八十せの波も於やゆぬまて　後人不知
同神祇
於康川ゆゆを世ゆを世して波世ゆ於乃めくをやゆ　従三位雅家

駿河海

新拾遺恋四
ゆゆれを後波の海の波波ゆゆゆゆゆを波ゆ人ゆ成ゆ　従三位行家
新後拾遺恋一
をゆねをするゆの海乃波ゆゆゆよも波の袖めゆゆん　摧津所桓翰

駿河

角田河　川原

下総

すみを川ゆをゆゆふゆゆをゆて　上下畧

古今旅
いはしれたるいさ事とそんなれ郭島我思人そやなしややそ　業平朝臣
新勅撰旅
まつち山夕越暮ていかされのをみこうしの独ひをわん　弁基法師
同
わう思人をせうや法せにをみこうの原乃ゆふこれのを　俊成
同恋一
角田川せきとにむをふ水代あをの意なにをの忘神ん　在原盛方
続古今旅
山里ををとこうの原ふ狩をしのなる島の郭とをを　中務卿親王
続後撰旅
数名栄よのあくふ角田川ゆきこの人はのをををまて　法皇清巻
玉葉旅
ちくへとをへぬ月のをみこうの郭の友をみるうひもな　院權大納言典侍
続後拾遺物名
あの代うちとせと通て角田川のつをみもあこの新を綾らす　二条大皇大后宮大貳
新拾遺旅
角田川おつれりふゆふ暮に涙をそふ郭郭ちうれ　俊成
同
限なく暮くをにけり角田川あわふ島の名我をこひて　内蔵
新後拾遺旅
我為ハ法ひををうぬいか濱れをみこうの恋の意やひ　祝部尚長

新続古今雑下
山せをふ事とはふ角田川をををぬ乃島の名もう　在原隆祐

信濃

続後拾遺夏
信のなるををれめこををを訪ふ色を春を時をうりうり　淡人不知

末松山

古今冬　又拾遺冬
浦近くかりくる雁を白波乃すをの松山ををのををみる　古真風拾人丸
古今大歌所作ものうた
恋をを通てあこ心ををのもをを末の松山波もおををん
後撰恋一
いつこの空をの松山乃今をををて越なる波をををる神ぞ　淡人不知
同恋二
我袖をををををの松山を浦をる波乃こをぬ日もな　左
同恋三
松山乃つをををる波ををををを袖を　贈太政大臣
同
あちをなくをををる松山波ををん事をを史に思をれる　同
同
巻もなく汐しをををる松山を下をく波をををををを　伊勢

同
あふさかの山をあをみわたる松山乃なを乃ひとりなるらん　元平のしこの女
同恋五　松山乃末こそ波はまくにしあれはたゝ神なれはこそ　土左
同恋六　松山は波高きゆへにこゆるなるあらしのみ吹　菅原宇文
後拾遺別　波くしの代はりにこそ見やみん来乃松しもいきの松を　相模
同恋二　越にけり波とをちこちて来の松千代をかけてはけふ　菅原能通
同恋四　袖にかけ波とをちこちて来の松山波こさしとを　清原元輔
金葉賀　いはせんとそこの松山波こさしとを　匡房
同賀　きみの代を来乃まつ山をかくと越白波の数も忘れを　永盛法師
千載夏　秋風を波とをちこちもやこ見ぬるんまをこさしを来の松山　菅原親盛
新古今巻上　霞たちそこれまつ山をかくと波をけふ行くこしのを　家隆
同冬　花のなをこ見けるかをうを表けをとをを今を来乃松山　寂蓮

同旅　たつかをのめ人もそこの松まつらん神ふ波やこすん　家隆
同恋四　松山と契をを人をつれなくて神こは波をけふ行かけ　定家
同雑上　白波のこゑををすこれまつ山を見やみををの月　加賀左衛門
新勅撰恋二　伝はいくをなをを乃数ゆをんなのめを逢一来乃をつ山　源家長
同雑四　たつの人ふをせをや白波乃をくををこゆををこれ松山　清輔
後後撰恋五　うをとをふ心のこゆる松山を数めをうひもなく成をを　源信明
同　秋とゆ人を交もををぬまつ山へををも波のこをん物ふ　中務
同　波こゆををうをみんとをを契ををのをく成ゆをこを乃ふつ山　俊成
同　ゆを波成ををこをこをめををふをも数松山を交も替ら　祐子内親王家紀伊
同雑中　松山乃こなをのををに波越てをを計をゆをを神をれ　按察使朝光
同　思ひをと思ふ物ををまつ山れ来こす波を神をゆれ行く　左近大将済時

後拾遺春下
来の海の山も霞のたゝ浪の花の波こそまさりたれ　慈鎮
同
ふれ花とそ見ゆる松山のこしをこそ越てうく波のあらなこ　為家
同恋五
り年乃越をこそ波越て無乃去来れとつうゝひなさ　春宮大夫実兼
同
思ひ入て神ゆも波をあらしふかり常うゝ来れ来の松山　太上天皇
同
毎事ハ思ひすてをいくゝあゝ波の越ぬかやをこそ来の松山　九条左大臣
同
波こしをいつふせんとゝゝのめりんつゝまゝの来乃松山　後鳥羽院大納言典侍
同雜上
いつふもん我方にこゆる白波のをこの松山猶うひもなし　右衛門督忠基
新後撰恋三
世こうけて波こさゝとそちされともつきやゝ山れ来の松山　為氏
同雜中
ゝふ松たゝへて難面をこの松越ぬ波とも是こうゝこそ　民部卿資宣
後千載恋五
をこ乃松あたゝ心の夕汐ゝ我方と波ゝこもわる　信実
同
いつ乃をの我松山の今とゝそこゆなゝ波ゝぬゝ神ゝ　兵部卿元良親王

同
三れしと契ゝ中乃来の松浦つゝ出ゝ波をこゆらん　為氏
後拾遺恋三
いつとなく波乃ゝれを来れ松ゝゝぬ袖を是こう新まゝ　相模
同
いつふせん命もをゝまつ山の上ゝなゝに松ぬ松りひをゝ　鎌倉右大臣
風雅雜下
七十乃年なを越て今を方のゝふゝのゝ来のまつ山ふゝ　法印延全
新千載春上
いつゝゝゝ来乃松山ゝとゝゝゝ波とせゝや春乃こゆ　俊頼
同恋五
ゝゝをこれ替波契れすをこのまつ神ふ波越ゝゝ見ゝゝ　大江行元
同雜中
思ひゝとゝふものゝゝ松山乃をこ越波ゝぬれつゝゝ　大納言朝光
新後拾遺春下
をこの松咲をこ散れ波乃ゝふゝ又やくゝゝひのまも番ゝん　後一位宣子
同秋下
をこの松猶ふ文ゝ中をこ越て波ゝゝいけゝ山れをの月　有家
同冬
をこ又来れ不つ山六十ゝも越ゝくゝゝのこゝんとをゝん　入道二品親王道助
同別
今ゝゝをこゝゝ乃来乃松風をゝゝをの来ゝや更ひなゝてん　女四宮徽子女王

同恋四
いかんと契りし波もやこえぬ末路のちよの松やま　従二位嚴子

同
契りぬる末の松山ちかひおきて思ひし人のあきなきを　津守国助

新続古今春上
春や先波よりこえて霞むらんすゑもこゆるを見れは松山　土御門入道前内大臣

同春下
いつまた又春のなかめも末の浦つなみこす山の有明の月　正三位知家

同
今さらにこゆらんかたも白波の泣なき名の末の松や山　中宮大夫公宗

同冬
ちはやくと思ひし峯の見ゆる松老の波よりあくる朝のれ　公宗母　欣子内親王

同旅
捨衣さり白波をよそにのみてみれはあはれりすゑの松山　権大納言実量

同恋三
こぬ人をまつこころをまた末の山をゆくよ波ても契りけん　兼好法師

類字名所和歌集第七終

此一部者采見廿一代集數多之中而抄出名所和歌者也唯愚瞽不撰恐有舛謬猶後見之輩勿憚改而已

寛永八年正月　吉日　法橋昌琢判

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan